

比叡山見学の中止で、異例の月末例会。出席者は9人でしたが、久しぶりのお顔もあってなごやかな会になりました。今回は、北畠顕家、新田義貞が相次いで討死し、起死回生を狙って関東、奥州に向かった船団も遭難するなど、南朝が大きな痛手を蒙っていく経過をたどりました。次々回の11月例会は、第二十二巻が欠文のため、第一冊の付録解説1「太平記の成立」を輪読します。

◇この日、読んだ箇所は次の通りです。

(一) 黒丸城初度の合戦の事

越前戦線緊迫 (P347, 349~351)

越前で強勢になった新田勢には、さらに越後の新田勢が加わり、九頭竜川・日野川合流点の黒丸城に立て籠もって防備に専念する足利方、斯波高経との決戦の期が熟しつつあった。

(三) 御宸翰勅書の事 (五) 八幡宮炎上の事

吉野からの勅書 (P351~353, 360~361)

吉野の後醍醐帝から、苦戦する石清水八幡の南軍を助けよとの勅が下った。義貞は弟義助に救援を指示、自身は越前に留まる。新田軍の動きを知った足利尊氏は高師直に八幡攻めを指示。勝負を焦った師直は、神殿に火を放って、南軍を降した。

平泉寺、足利方に (P364~367)

(六) 義貞、黒丸合戦の事 (七) 平泉寺衆徒の事

義助は八幡攻撃から引き返し、義貞に合流。一方、高経は所領安堵の約束で平泉寺を味方につけた。こうして、九頭竜川を挟み北に新田軍、南に斯波軍が向かい合い、延元3年(1338)閏7月2日、両軍が決戦に挑む。

(九) 水練栗毛の事 (一〇) 義貞朝臣自殺の事

義貞、不慮の討死 (P374~379)

平泉寺衆徒の籠る藤島城の戦況が気になった義貞は、わずかな供を連れて視察に出る。灯明寺暇で藤島城救援に向かう斯波軍の戦鬨隊に遭遇、足場の悪い深田で矢攻めに合い、なすすべもなく自害した。

※義貞の胄 江戸時代に灯明寺暇の水田で見つかった

胄が、福井藩軍学者によって義貞の着用と鑑定され、藩はその場所に義貞戦死地の碑と小祠を立てた。

(一一) 義貞の頸実検 (一二) 義助敗軍を集める事

新田軍の撤退 (P381~384)

斯波側は、顔に残る傷跡などで義貞の頸と断定して京に送った。兄義貞を失った義助は三峰、仙山、湊の各城に守将を残し、自身は越前国府に退いた。

(一三) 左中將の頸を懸ける事

勾当内侍の嘆き (P384, 5, 388~392)

義貞の愛妾、勾当内侍は都で獄門に懸けられた義貞の頸を見て、世を捨て、嵯峨で仏の道に入った。

(一四) 奥勢難風に逢ふ事

南朝大船団の遭難 (P392~396)

北畠顕家、新田義貞を相次いで失った南朝は、結城宗弘の進言で東国に船団を送り出し、三度目の奥州軍上洛を目指そうとした。不運にも船団は天龍灘で遭難し、四散したが、後醍醐の没後、後村上天皇となる義良親王は伊勢の国崎の神風浦に吹き戻された。

※義良親王漂着地 同じ遭難者の宗良親王が編んだ新葉和歌集に、義良親王が漂着した伊勢国篠島に勅使が見舞いに行ったという記述がある。篠島が史実。

(一五) 結城入道墮地獄の事

朝敵の頸を供えよ (P396~399)

伊勢・安濃津に漂着した結城宗弘は、その地で病没。「朝敵の頸をわが墓に供えよ」と言い残した壮烈な最期だったという。

第22巻に替え、第1冊解説(11月16日)

- 1) 453 太平記は~455 されている
- 2) 455 太平記を~458 述べる
- 3) 458 太平記全~461 わけだ
- 4) 461 あるいは~464 主張するのだ
- 5) 464 このような~467 うかがえよう
- 6) 468 北朝の~471 芸だったろう
- 7) 471 看聞御記~473 存在だった
- 8) 473 後醍醐~476 容易なのだ
- 9) 476 恵鎮が~479 考えがたい
- 10) 480 また~482 擱筆だろう
- 11) 482 ところで~486 わけだ
- 12) 486 だがそれ~488 であった